会　議　録

会　議　名	第10回　野田市生物多様性のだ戦略市民会議
議題及び議題毎の公開又は非公開の別	（１）パブリック・コメント手続の結果について（公開） （２）第２期生物多様性のだ戦略の策定について（答申）（公開）
日　時	令和５年２月２４日（金） 午前１０時００分から午前１２時００分まで
場　所	市役所低層棟４階委員会室及びリモート参加
出席委員氏名	【対面参加】 会　長　長谷川　雅美 委　員　新保　國弘、田中　勝美、柄澤　保彦、茂木　康男、土屋　守、香西　陽一郎、村田　歩、柳澤　朝江、岡田　壽 【リモート参加】 委　員　鈴木　隆博
事　務　局	鈴木　有（市長） 今村　繁（副市長） 宇田川　克巳（自然経済推進部長） 池澤　孝之（みどりと水のまちづくり課長） 茂木　嘉則(みどりと水のまちづくり課課長補佐) 野島　真紀（みどりと水のまちづくり課自然保護係長） 満田　和総（みどりと水のまちづくり課自然保護係主事）
欠席委員氏名	委　員　朽津　和幸、田中　利勝、黒川　茂、矢口　勇二、鈴木　哲雄、川﨑　裕幸
傍　聴　者	１名
議　事	第10回野田市生物多様性のだ戦略市民会議の会議結果（概要）は次のとおりである。

１　開会
《事務局：池澤課長》
　開会の挨拶。委員総数 17 名のうち 10 名が来場にて、1 名がリモートにて、合計 11 名が出席し半数以上が出席しているため、条例の規定に基づき会議が成立する旨を報告。欠席者は朽津和幸委員、田中利勝委員、黒川茂委員、矢口勇二委員、鈴木哲雄委員、川﨑裕幸委員。
　今回の会議は希少種などのデータを取り扱わないため傍聴が可能であること、また傍聴希望者が１名いることを報告し、これを許可することの御了承を頂き、入室を許可した。

２　会長挨拶
　本日は 10 回目の市民会議となる。事務局には様々な準備をしていただき、また委員の皆さんには、野田市内の隅々まで自身の目で見ていただき、自分もまた見させていただいた。その上で委員の皆さんから頂いた様々な御意見や市の方で考えていただいたことを取りまとめる機会を持つことができたことをうれしく思う。これまでの御協力に感謝するとともに、本日はよろしくお願いしたい。

《事務局：池澤課長》
　それでは、以降の議事進行を長谷川会長にお願いする。

３　議題：パブリック・コメント手続の結果について（資料１）

《事務局：野島係長》
　資料１を使用し、パブリック・コメント手続の結果及び素案の誤字について説明

《委員》
　「竹林整備ボランティア」に参加されている方からの意見が提出されているが、これ以外に市の方では、他の自然環境関係の団体について把握しているか。

《事務局：野島係長》
　自然保護団体の把握について、現在活動していることを報告していただいている団体があるほか、活動実施に向けた土地への立入りに際して、地権者等に相談する中でコミュニケーションを図りながら把握をしている。今後も精力的に自然保護団体を把握していきたいと考えている。

《委員》
　佐渡に知り合いがおり、訪れたことがあるが、上から見ると田んぼの畦が青々としている。野田市でも基盤整備事業を実施する前の田んぼはホタルが飛び、緑の湿地であったと記憶している。畦畔は村総出で手刈りしていた。ところが高齢化とともになかなか手が回らないということで、除草剤を使うようになった。高齢化で労働力が足りない。今の田んぼについては、そういった農政上の問題があることを市民に理解していただかなくてはならない。用水路の清掃も農家組合が日曜日に実施しているが、高齢化のためにままならないという話が土地改良区に届いている。そのような現状の理解が必要である。そのような基盤整備に対して、政府は多面的機能支払交付金事業を実施しており、農道や水路整備に際して我々も交付金を活用している。しかし、手

刈りの全面実施というと難しい。これも市民に理解していただきたい。農地の管理については、農家組合だけでなく自治会や青年会、関連団体へ向けて農家側から呼びかける必要があるのではないかと思う。交付金事業によって労賃を支払うことも可能である。柄澤委員のグループが年に何回か土地改良区と合同で野焼きなどの管理作業を行っているが、これも多面的交付金事業の一環として実施している。そういったことをもっとアピールすれば、市民にも農業の現状を理解していただけると思う。市民意見に対する市の考えは妥当と思う。

《委員》
市の考えに賛成である。自分も農家であり、東葛北部土地改良区に属している。10数年前より、農薬を使わない土手、あぜ道、水路の整備を年２回、６月と７月に整備している。また、虫の駆除を兼ねて１月から２月にかけて、消防署と連絡を取りながら野焼きを実施している。ここには農地を持っている人も持っていない人も自治会単位の全員参加でやっている。農家組合だけにお願いするのではなく、住んでいる人全員に動員をかけている。当日現場では、みんな張り切ってやっている。健康にも良く、地域もきれいになるし、野草も芽生える。野田市内には土地改良区が四つほどあるが、積極的なところもあればそこまで手が回らないというところもある。時間をかけ、意思疎通を図りながら進めていければと思う。東葛北部土地改良区では学校の子どもたちを対象とした事業が幾つもある。学校、そして生物多様性とのつながりで交付金事業を実施しているので、今後、組織化等を進めていく中で、関連団体や他の地域の団体と情報共有しながら、予算が有効に使えるよう、常にアップしながら進めていけると良いと思う。

《委員》
市の考え方の中で、「銃の乱獲」とあるが「銃による乱獲」の間違いではないか。これを読む方は様々な世代に渡ると思うが、明治時代の銃による乱獲について、エビデンスはあるのか。どういう根拠に基づいて明治時代に銃による乱獲があったとしているのか。これは資料として存在するのか。

《会長》
銃による乱獲があったのは事実である。

《委員》
コウノトリが「一度は絶滅した」というのは日本語として正しいか。

《会長》
野生絶滅のことを略して絶滅と言っている。野生状態では絶滅したということで、日本語として正しい。

《事務局：宇田川部長》
「銃の乱獲」は「銃による乱獲」に修正させていただく。野生絶滅という考え方があるが、国内のコウノトリについては、一度完全に絶滅しており、ロシアから個体を持ち込んで保護増殖し、それを野生復帰させている。絶滅原因については、銃による乱獲や農薬使用により餌となる生きものがいなくなったなど、歴史的根拠は存在する。

《会長》
本日会場入りする前に、運河駅の前で、子どもがカラスと「カァカァ」と鳴き合っていて、ほのぼのとした気持ちになった。私たちは人間で、人間以外の生きものは命が違うと思いがちだが、生命の誕生から現在に至るまで、様々な生命が互いに交雑して今に至っており、根源としては同じである。他の生きものとも遠い親戚のような感じで互いにコミュニケーションが図れるのではと感じた。自分は生物学者なので、生物多様性というと、つい生物に重点を置きがちだが、大事なところは多様性である。命の多様性、生き方の多様性、これは個人だけでなく、社会として、国としてもそうだと言える。その中で、自己と他者の関係を尊重する、多様性を尊重するというところが、生物多様性の本当の意味なのではないかと思う。戦略という形でまとまり、どこかで誇らしい気持ちは当然あるが、野田市が一番であるとか、そういう勝ち負けでは全くないと思う。多様性の尊重という精神に基づいて、人と人の多様な生き方の尊重と、他の生きものと合意する、和解するということがとても大事だと改めて思う。この国には「和を以て貴しとなす」という言葉があるが、これは人間同士、生きもの同士でそういう勝ち負けではなく、共に生きていくという意味でもとても大事なことと思っている。そういったことを委員の皆さんには心の底から理解いただき、この会議に、そしてこれまでの審議に臨んでいただいていたかと思っている。そういうことで、この本日の答申について御理解いただけたと思う。議案第１号については、一点修正いただいた上で、パブリック・コメントに対する市の考えを当市民会議として承認することに異議はないか。

（異議なし）

《委員》
「生物多様性」という表記について意見が寄せられていたが、この言葉は分かりにくいため「豊かな自然」に置き換えてはという意見があった。多くの市民、子どもたち、あるいは家庭で認識を深めるという点では、表紙の「生物多様性」の下にかっこ書きで、（豊かな自然）といった文言を書き添えた方が、子どもたちを含めた多くの市民に生物多様性を認識してもらうために良いのではないか。再度、考慮した方が良いかと思う。また、あぜ道の話が出たが、たしかに昔はあぜ道を鎌で刈っていた。だから草丈だけでなく、そこに生息する昆虫類も根こそぎ死滅するようなことはなく、だから自然が残っていたのだと思う。昔の農家は現代のような大規模農業ではなかった。農家数が多く、人力でできる範囲の農業をやっていた。手間がかからず便利にしようというのは誰もが考えることだが、農家も同じである。それが高じて、農薬・除草剤を使用するようになる。そうなってくると、生物は生きられなくなる。これが今、問題になっているところだと思う。同時に、昔は水路の掃除なども人力で行っていた。それが機械や薬剤を使用するようになると、昆虫を根絶させる方に近づいてしまう。これが生物多様性の一番の問題だと思っている。一つ一つ考えていくと、生物の生死の在り方を是正していくというようなことも考えていかなくてはならないと思う。時間も技術的なものも必要と思うが、そういうものを念頭に置いて、生物多様性に取り組むことが必要ではないか。

《事務局：宇田川部長》
これまでの会議において「豊かな自然」という言葉を入れるかどうかについて議論していただいた。その中で、戦略の表紙ではなく、パンフレットの中、あるいは戦略を知らせるときに入れていくという話で委員の皆様には御了承いただいている。この

戦略を宣伝する、そして生物多様性の取組を進めていく上では「豊かな自然」という言葉をどこかに入れて、周知していきたい。表紙のタイトルが長いと分かりづらくなるため、このままで良いとの御意見も頂いており、今回、これについては修正せずに進めていきたいと考えている。

《委員》
「生物多様性」の下に、括弧書きで「(自然の豊かさ)」を入れるようなことを考えた方が良いかと思う。家庭で、食事後の団欒(だんらん)の際に話題になったときに、分かりやすい表現を添えておいた方が話題が広がるのではないか。

《事務局：宇田川部長》
「豊かな自然」のような分かりやすい言葉は必要であり、事務局もそこは認識している。戦略の概要版等を作る際には、是非加えたいと思う。

《委員》
「生物多様性」の下に「(自然の豊かさ)」を書き加えると、やはり長くなってしまう。生物多様性という言葉について、これまでは浸透させる機会が少なかったと思う。新たに会社を作る、起業するという場合と同じで、ゼロではないが認知度の低いところからスタートすることなので、短い言葉・表現の方が良いと思う。生物多様性とは何かといった説明の中で「自然の豊かさ」という言葉を使っていく方が良いと思う。最初のタイトルが長々しくなると、焦点がぼけてしまうのではないかという気がして、前回会議の場でもシンプルな表現でいくということになったかと思う。今後、生物多様性についてもっと告知していく、広げていく。これがとても大事なことだと思う。それから農家の話があったが、昔は機械がなかったから手でやるしかなかった。手で草を刈るといっても、今の農家は米を作っても生活できず、生活するためにはある程度合理化しながら、他の仕事と兼業しながら、何とか今日一日を過ごす稼ぎをしているというのが本音だと思う。農薬を使うことを悪いと言っても、農家は米が取れなかったら死活問題である。野田市においては、積極的に農協、土地改良区、あるいは行政が中心となり、減農薬、黒酢米をかなり推奨している。東葛北部土地改良区でも８割の田んぼが減農薬栽培である。減農薬では昆虫が全て死滅するのではないため、場所によっては随分ドジョウやカエル等コウノトリの餌が増えているところもあり、そういった努力はしていると御理解いただきたい。様々な虫が繁殖し過ぎて米が食べられてしまうことが農家にとって致命傷である。農薬については農家としての悩みもあり、いろいろなことが解決されていけばうれしいし、それが共存という範疇の中に含まれると思う。生物も大事だが、人間が生きていけるのが一番大事なことだと思っている。このような現状を踏まえ、パブリック・コメントに対する市の考えについて、私は良いと思っている。あとは、これを浸透させるのにどうするかということが一番大事だと思う。

《委員》
戦略の素案はできた。これをこれからの野田市にどう活かしていくか、問題はそこだと思う。生物多様性をどう理解させるかについては、知ってもらう機会を増やす。そのためには、これからの取組を重点的に考えていかないと、絵に描いた餅になってしまう。もったいないと思う。

《会長》
当市民会議として、パブリック・コメント手続に対する市の考え方を、一部修正を行った上、承認するものとする。

議題：第２期生物多様性のだ戦略の策定について（答申）

《会長》
(答申書読み上げ)

《鈴木市長》
日頃より市政運営全般に御支援いただき、御礼申し上げる。令和元年 11 月より本日まで、３年以上に渡り計 10 回を数える会議において、皆様方の御熱心な審議を頂いた。感謝申し上げる。新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、スケジュールに大幅な変更が生じ、約１年遅れたが、委員の皆様方の貴重な御意見を頂き、すばらしい第２期生物多様性のだ戦略を作成していただいた。頂いた答申に基づき、速やかに市民の皆様に公表していく。また今後は、この戦略に基づいて、これまで進めてきた生物多様性の取組を、更に充実・発展させ、自然環境の保全・再生、また利活用を進めていきたい。また、生物多様性について、多くの市民の方に御理解いただけるよう、広報も進めていく。改めて長期間にわたる皆様方の御協力に感謝し、御礼の挨拶とさせていただく。

《会長》
委員の皆様からも一言、お願いしたい。

《委員》
この会議に参加させていただいて、いろいろ皆様方が生物多様性について考えていらっしゃる。また、活動していらっしゃるということについて、大変感銘を受けた。特に市としても以前から様々な取組をされていたことで、今後も期待が持てる。この答申の内容というもの飽くまでも土台であり、これからが本当のスタートだと思う。その中では、まだまだ認知度の低いこの言葉をもっと地域の中に広めながら、一緒に動いていかないと戦略は実現できないと思うので、いろいろな意味で協力していきたい。

《委員》
自分は流山市に近い方に住んでおり、理窓公園の植生調査を行っている。理窓公園は野田市と流山市の両方に渡るため、両市の方々に注目していただきたいし、面白い場所だと思っている。主に行っているのは植生調査だが、本日話題に上がったあぜ道の管理についても同感であるし、農家の方の苦労も良く分かる。かつての農業が歴史の中に消えていってしまうのではなくて、私たちが生きものや農家の在り方なども考えて、そして子どもたち孫たちにも伝えていきたいという思いを新たにした。この会議に出席し、自分自身も大変勉強になった。これを活かして少しずつ進めていきたい。

《委員》
自分が住む川間地区では雑木林がどんどん切られて、宅地化が進んでいる。自然がだんだんなくなってきているが個人の所有する土地を保存するのはなかなか難しい。

そこで、こうのとりの里と里山自然園が直線距離で１．３キロメートル程度しか離れておらず、これらの連携を強力に進めて、一体的に自然保護、環境保全をやっていけたら良いのではないか。また、自然保護団体の数という話があったが、個々の団体は活動しているが、横のつながりがほとんど見られないと思う。横の連絡ができる環境が必要ではないか。例えばコウノトリの施設の一部を環境団体の拠点にできれば、情報交換の場にもなる。また、こうのとりの里への来訪者は、自然環境に関心のある方が多いと思うのだが、そういう方に自然環境の保全に協力していただくといった取組ができるのではないかと思っている。そのためにも、今ある施設をもっと活用できるようにしてほしい。

《委員》
　第１期戦略のときは国から押せ押せということで、市の方も策定に向けてかなり大変だったと思う。そのために十分な調査時間が取れなかった。今回はそのようなことのないようにと副市長にお願いしたところ、第２期については、十分な調査時間を頂き、感謝申し上げる。本日も、生物多様性という言葉は難しいのではないかという意見が出た。前回策定時からそうであったが、市が作ったこの戦略を、我々の団体が市民に対して何ができるのか、お手伝いができるのかということだが、生物多様性を学ぶ自然観察会と銘打って、全4回シリーズでのイベントをこうのとりの里で実施する。その中で、生きものとの関わりについて啓蒙したい。自分はこうのとりの里でボランティアをやっている。前市長から、江川と利根運河、野田市の自然環境がどういう状況なのか、それを分かりやすくこうのとりの里の来園者に説明してあげてほしいと依頼されたので、ボランティアを行っている。野田市の田んぼの状態や野鳥同好会が発足した 45 年前と今とで野田市の鳥の生息状況がどう変わったのか。減った場合には原因はどこにあったのか。そういった話を来園者に説明したところ、自然を残してほしいと話す市民が多い。市民団体の役目は今後ますます重要になると思う。市に任せっぱなしでは駄目で、市民団体が一緒に動かないとやはり難しいと思う。今後も引き続きよろしくお願いしたい。

《委員》
　市民会議の中でいろいろ調査していただいた、委員の皆さんには御礼申し上げる。自分が生物多様性に強い関心を持ったのは、昭和 22 年、新制中学 1 年のときに、両親が食べていくために農業を始めた際に、中学生の力も活かしたいということで、農業を手伝ったことがきっかけである。様々な自然に対する疑問を抱き、知識を増やしていった。今、一番心配しているのが、人々が自然から離れているのではないかということである。子どもたちが野原に出て、あるいは学校の行き帰りに通学路の道すがら咲いている花に関心を持たない。我々年をとった者が生物多様性について勉強しても効果ははっきり出ないのではないか。子どもたちを含めて、みんなで学んでいく方が良いのではないか。市長が学校へ行って子供たちにいろいろな話をしている。今年、我々が指導しているボーイスカウトの新春集会で市長から御挨拶いただいたが、とても分かりやすい話し方で接していただいた。この姿勢が必要なのではないか。いかにして子どもたちと一つの話題で話し合えるか。「何だろうな」というところから入らなくてはならないので、今後も是非子どもたちを、子どもたちのいる家庭を巻き込んで進めていけると良い。そうでないと本当の意味での基礎はできないと思う。子どもはいろいろなことに関心を持つので、科学的なことだけでなく、自然に対する関心を持ってもらいたいという気持ちに変わりはない。

《委員》
第２期戦略のすばらしい所は、管理目標がきちんと書かれている点である。私は流山市の環境審議会の会長を務めており、生物多様性の第３期の諮問を、市長より受けている。これから議論していくところで、市の環境部にこの野田市の戦略の素案を読むように伝えた。流山市の職員もこの戦略はすごいと話していた。そして環境審議会の委員に、是非参考になるから読んでみてほしいと素案のURLを紹介してくれた。野田市の戦略を参考に、流山市も３期の策定を進めたいと思う。自分は江川地区の自然・歴史調査を担当した。ここでは「７つの魅力」を挙げたのだが、その後、更にもう一つ魅力を見つけた。それは、江川地区の農家の方々が、子どもたちの教育に情熱を傾けて応援していた時代があったことである。福田村の江川耕地整理組合は明治 44 年に設立されたが、それより早い明治 32～33 年に、現在の福田第二小学校が修学旅行を 3 回実施している。泊まりがけで、遠くでは銚子まで行っている。他にも市川や取手に出かけているが、すべて利根運河から船、和船や汽船に乗って出かけている。そういうことが分かってきたので、発表しなくてはと思い、明治大学に事務局を置く「利根川文化研究」という学術誌に研究ノートとして発表した。

《委員》
市民会議の重さというものを感じながら毎回参加させていただいた。生物多様性戦略の素案が出来上がり、今後、行政の舵とりが非常に大事になっていくと思う。それに対して積極的に協力したい。野田市の自然の今の姿を把握して広めていただく。そういう舵とりが一番重要となる。今の姿を知るためにということを考えると、生物多様性調査に関わった団体や個人からの報告といったもののデータを一元的に集約していただきながら、横の連絡を密にしていくとの市の方針に同意する。調査員の方々がもっと交流できるようにしていただけると様々な面で変わっていくと思う。現地を見て今の姿を知ってもらい、それについて行政と連絡を取り合いながら進めていただけるとよい。調査データの集約を継続していただくとともに、調査で採集された現物標本が残されるよう、是非、市の郷土博物館に標本を蓄積するスペースを確保していただけたらと思う。この素案が生きるよう、積極的に協力させていただきたい。

《委員》
野田市内で企業活動を実施している者の立場で市民会議に参加してきた。2 期目の戦略には具体的施策が書かれているので、微力であるかもしれないが役に立つことができればと思っている。今後ともよろしくお願いしたい。

《委員》
今年度、柳沢小学校では、行政、地域団体、PTA や保護者に協力いただき、柳沢市民の森などでの教育活動に取り組んできた。この教育効果は非常に高い。子どもたちにまずは知ってもらいという視点から、現在、東部公民館で写真展、ポスター展、そして子どもたちが自作した本を展示している。それを見ても、短期間で小学生でもこれだけできるのだということが良く分かる内容になっている。つまり、知識・理解だけでなく、学び方を学ぶ。そして学校を中心として子どもたち、地域、行政、保護者がつながることを通して全身的な教育につながっていくということを実感した。どの小学校もそれぞれの地域に自然環境がある。教育に手厚い野田市だからこそ、学校教育としてもう少し裾野を広げる活動の可能性があると思う。教育は今を見るのではなく、10 年後 15 年後を見ていかなくてはならないと思う。そう考えると、今の子どもたちに、いかにこの野田市のことを知ってもらうか、そのことが結果的に郷土愛を育

み、野田市を大切にしていく姿勢が育っていくと感じている。学校教育ができることはまだまだあると痛感している。これからも、自分たちなりにいろいろ探していきたいと考えている。

《会長》
　本日は最後の市民会議となるが、委員の皆さんには審議に御尽力いただき、また、活発に意見を述べていただいたことを感謝申し上げる。自分が自然を大切にすることを意識し始めたのは、母親から、戦争直後に食べものを求めて東京から長南町に着物を売りに行った話や、「国破れて山河在り」というが、千葉県にこれだけの自然があって食べものもあり、だから東京を救えたという話を聞いたことによる。私たちが生きていく上で自然が残っている、あるいは自然を大切にするということが根本なのだと感じた。近所に飛行場があったのでグラマン（空母艦載機）が機銃掃射してきたという話も聞かされてきた。命を大切にする、自分の命だけでなく他人の命も大切にするという中に、命の多様性ということも含まれていると思っている。そういうことを子どものときに植えつけられると、いろいろなことを自分で考えて、ではこうしようというように発展できると思う。今回の素案は、市役所の皆さんが、上から言われた、国から言われたということではなく、大事なこととして主体的にまとめていただいたことが実を結んだと思っている。市長には、答申の意味を難しい言葉ではなく素直に受け止めてもらえたと思う。市の職員の皆さんが、生物のことではなく、命を大切にしていくという原点から様々な施策を考えていくということが、戦略の心臓に当たると思う。上から目線でなく、自ら考えていただくという姿勢が、市役所の皆さんにも浸透してそれが市民にも浸透していくという相互作用が生まれることを改めて感じた。

《事務局：池澤課長》
　長谷川会長及び委員の皆様には、御審議、答申いただき感謝申し上げる。以上をもって、第10回野田市生物多様性のだ戦略市民会議を閉会とする。